NOT CRY MAN

三ヵ月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＯＴ　ＣＲＹ　ＭＡＮ

【Ｎコード】
Ｎ２９５０ＢＡ

【作者名】
三ヵ月

【あらすじ】
科学と魔法が混在する世界…。
地球は…世界は変わった。
科学魔法とゆう新たなジャンルを作る《ＳＭＡ計画》を実行、しかしそれは失敗に終わり世界に魔獣が解き放たれた。
それから、十数年後…世界は平穏を取り戻しつつあった。

プロローグ

ゴポゴポと音を発てる等身大のポッドに一人の赤子がうずくまっている。
「如月博士。」
博士。と呼ばれる４０代半ばの男はそのポッドのすぐ横で赤子をまじまじと見つめていた。
「……。君、見たまえこの素晴らしい《形》を。」
「……《遺伝子組み換え》は成功ですね。」
「あぁ…。」
博士はうっとりした表情でポッドに体全体をピタリと貼り付け抱きしめるようにした。
「この子は《魔獣と人間のハーフ》だ。いつか必ず、世界を…いや地球を元に戻してくれるはず。」
「…そうですね。」
しばらくの沈黙が続き…ふと博士が話し始めた。
「この子の…この子の名前は…如月リョウだ。」
「如月……リョウ。……！博士その名前は。」
「あぁ。死んだ息子の名前さ。……皮肉だが、俺にはもうこの子しかいないんだ。」
「博士…。」
博士は悲しそうな顔を浮かべ、ポッドに入ってある栄養ポンプと空気を排出しようとレバーに手をかけた時。研究室の扉が乱暴に開けられる音が聞こえ二人の周りには重装備をした特殊部隊のような大柄の男が数人で囲んでいた。

「ちっ！？遅かったか！！」
「博士。あの子は渡してはいけませんよ。」
「わかってる！！。」
二人だけに聞こえるよう何やら二人は話し出す。
そこへ華美な厚手のコートをきたいかにも王族の人物が二人の前に出た。
「グットモーニン。如月博士に睦月助手。」
「カルディア王…！」
予想外。そう言った顔を浮かべる博士。
「…世間話など無用だな……約束通り。赤ん坊を引き渡して貰おうか。」
「渡しません！！この子はそんなことの為に利用されるものではありまーーー」

パンッ。研究室に火薬の匂いが広がった。
「えーー。うっぐぁあああああ！！！」
「睦月君！！」
「五月蝿いな……黙れ。」
王は懐から取り出した拳銃をもう一度助手に向けて放った。

パンッ。パンッ。

助手は声を上げることもなく死んだ。

「睦月…くん…！！くっ！！。」
博士はその悲惨な亡骸の開いた口と目をゆっくりと閉じてやった。

パンッ。
「ッ！！」
博士と目と鼻の先でコンクリートが削れた。

「次そんな真似をしたら確実に殺す。……いや、めんどくさい殺すか。」
王は博士の脳天に拳銃の先を向ける。
博士はゆっくりと目を閉じこう言った。
「あの子の為に死ねるなら本望ですね。まぁ…あなたのような偽善者には到底理解し得ないでしょうが。」
「……それだけか？なら死ね。」

パンッ。
乾いた銃声が研究室に響き渡った。

一章　赤目の少年（前書き）

投稿が遅くなってしまいました。

次回からは一週間に一話のペースで進めていきたいと思います。

・登場人物

如月リョウ

カルディア王

天野時雨

サム・ティセーフ

華瀬薫

一章　赤目の少年

大きな宮殿のある一室に少し年期の入った二枚扉がある。
その扉の奥からはコーヒーの匂いが漂ってきていた。

扉を開けるとそこはどこにでもある事務室で二人の男女が置かれてあるソファに腰掛け、なにやら談笑していた。
男は少し癖のある黒髪で、顔立ちはとても整っている。
赤色のパーカーに迷彩柄のボトムス、薄茶のブーツ。と言った外装である。名を如月リョウと言う。
女は綺麗なストレートヘアーで淡い青色の髪が肩甲骨辺りまで伸びている。綺麗な顔立ちで見た人誰もが美人と讃えるだろう。名を天野時雨という。
白いワンピースで青いリボンがつけられている、いかにも清楚と言った感じだ。
「そういえばリョウ、最近仕事してないね……ってことは国は平和ってことなのかな？」
「いろいろ突っ込みたいトコあるんだけど……」
とリョウは苦笑いしながら言った。
「平和って言えば平和なのかな～？　大きな事件とかもないしね」
「そだね……あ、リョウって今いくつだっけ？」
「……時雨（しぐれ）と同じ１８歳だよ……去年高校でたばっかじゃん」
「あ、あはははは……そうでした」
時雨は苦笑いしながら最後に「てへっ」と付け足した。
「ほんと天然……でも時雨らしいからいいや」
時雨はプクーと頬を膨らませた。
「ちょ……！　どういう意味だよ～！？」
リョウはクスリと笑みを零す。

「そのまんまの意味だよ」
一向に頬を膨らます時雨に対してリョウは片手で頬の空気を抜いた。
その光景はさも恋人同士がする＜スキンシップ＞にしか見えない。
しかしこれらの光景は見慣れているらしく扉の前で仁王立ちしていた男は「コホン」と二人に聞こえるようにわざと咳払いをした。
「そろそろいいかね……」
びくんと体を振るわせた時雨とリョウはぎこちなく首を男の方へと向けた。
二人は口を揃えて。
「「王……様……」」
といった。

リョウ達がいるここ、カルディア王国は別名＜北の国＞とよばれる。

世界は４つの国で構成されており北はカルディア、南はジグソウ、東はアルカナ、西はカルメンとそれぞれ東西南北平等に分け与えられている。
その中で北の領土を占めている国だから北の国なのだ。
カルディアは年中肌寒い日が続き最低気温は－３０℃冬はこれに近い気温である。

リョウはあの後王様に連行（？）され現在王室の扉の前にいた。
「我が名をもってしてその扉を開け」
すると扉は自動で開き中から装飾華美な家具類がリョウの目を見張った。
「……」
「そこのソファに座りなさい」

王様に促されソファに座る。何の素材を使えばこんなに気持ちのいい肌触りになるのか疑問だった。

コーヒーを二つ手に持った王様がリョウの傍にあるテーブルに置くと自分も反対側のソファに座った。

……普通の王様ならこんな事はしないだろう。

「お前の好きなブラックだ。　口に合うといいんだが……」

「いえ……とても美味しいです」

王様は満足と言った顔を浮かべる。

恐ろしくてまずいなどとはいえないが。

「……さてと、単刀直入に言う。　お前に仕事が入ったぞ」

「やはりですか……」

先ほどの空気とは一変、真剣な眼差しで王様はいった。

「騎士団からの応援要請だ。　相手はヘカトンケイル（百手の巨人）……らしい」

ヘカトンケイル。百の手を持つ巨大な異形

凶暴差と物凄い怪力があるゆえにタルタロス（奈落）に封印された伝説の魔獣だ。

王様はそんな相手が現れたのにも関わらず別段取り乱した様子も見受けられない。

「いけるか？」

「はい。　秒で片付けます」

リョウのその態度に王様はにやりと笑みをこぼした。

「さすが……＜魔人＞だな」

リョウは王室の扉からでる時にこう言った。

「バックテールの異人ですから」

王様がみたリョウの瞳は赤色に光ってい

た。

ーーー

荒れ果てた雪山の地に数百の剣と楯を持った集団が目の前にいる巨大な百手の巨人に立ち向かっていた。
「ゴルゥラァァァァ！！！！」
鼓膜が破れるような咆哮と寒さに回りにいる騎士団員の精神力を削っていく。
いつ発狂してもおかしくないそんな状態だった。

「団長……」
「落ち着け……落ち着くんだ……」

任務はいつものとおり魔獣達の間引きとタルタロス周辺のパトロールだった。
しかし、いつもとは違う嫌な感じが団長……サム・ティセーフを襲っていた。

それはやけに魔獣と遭遇しないことだった。
この時素直に撤収していればよかったものをサムは自分の心にある好奇心のようなものに支配されていた。
タルタロス直感的にそう思った。本来ならば立ち寄らない異境の地を。

そして遭遇してしまったのだ。百手の魔獣ヘカトンケイルに……！
ヘカトンケイルはサム一行を見るなり襲い掛かってきた、サムは反射的に持っていた緊急用の結界を出しヘカトンケイルをその中に閉じ込め、今にいたる。

緊急用の強力な結界もあと少しといった所……絶体絶命のピンチだ。結界が割れてしまう前にバックテールの連中が片付けてくれれば……。

バックテールは主に後処理などを専門とする言わば《なんでも屋》みたいな組織で、報酬金さえ渡せば絶対に失敗することなくパーフェクトにこなしてくる。
組織人数はたったの6人、しかも一人一人が騎士団、三個師団分の強さ……たったの6人で国の強さを誇る。
……末恐ろしい連中だ。

そんなことを思っていたサムはヘカトンケイルの様子がおかしいことに気づいた。

……何かに怯えている？

あれからまったく抵抗する模様はなく不自然に自分のてで自分を守ろうとしていた。

「一体……！　まさか……な」
サムはゆっくりと後ろに顔を向けた。

サムのすぐ傍らに赤目の青年がヘカトンケイルを睨みつけていた。

「うわぁぁ！！！」
サムはそのまま腰から崩れ落ちた。
「団長？？　って君！！　いつからそこに！？」
サムの悲鳴を聞いて今青年を見つけたかのように他の騎士達もざわ

めき始めた。

ーーー

青年……ことリョウは今更ながらざわめき始める騎士団達に目もくれず特定の人物だけを探した。
それは依頼した人物もとい騎士団長だった。
（……ヘカトンケイル、百手の巨人か……期待してたけど弱いなぁ～少し睨んだだけで怯えて……まぁまずは団長を……）

リョウは辺りを見回し団員とは違う鎧を探した。
が探す必要もなくすぐ足元に彼はいた。
「き……君が……バックテール……だな？」
彼は尻餅をついていてとてもなさけなかった。
「あ……はい、依頼者のサム・ティセーフさんですね？」
サムはこくんと無言で頷いた。
「依頼内容は魔獣排除とありますが、よろしいですね？」
サムはまたもやこくんと頷いた。

「代金は６８００００円です。　後ほどカルディア王へお支払い下さい」
リョウはそう言うとヘカトンケイルに向かって。
「展開魔法ーブラッディハンド（鮮血の手腕）」
するとヘカトンケイルのちょうど真下から赤黒い手が無数に伸びて飢えた獣のようにヘカトンケイルを奈落の底へと引きずる。
抵抗のできないヘカトンケイルは悲鳴に近い咆哮を叫びながら無数の手によって真っ黒の穴へとひきずられて行った。
「自分と同じ手に引きずられるのは最高だっただろう？　そのままタルタロスで苦しみながら死ね」

リョウはそう言うと騎士団の制止の言葉も聞かずその場から離れていった。

ーーー

「あ～……筋肉痛だぁ」
「おっつ～リョウ……」
リョウはバックテールの本部（コーヒーの匂いがする部屋）にあるソファに寝そべっていた。
「魔獣討伐は疲れなかったのに行くまでがめっちゃ疲れた～……」
「あ～……どんまい」
時雨はコーヒーをテーブルに置き自分も反対側のソファに座った。

「おっ、コーヒーありがとう」
「どう致しましてっ」

にこりと微笑む時雨、それに対してリョウも微笑み返す。和やかな雰囲気が部屋全体を包み込んでいた。
「……ふぁぁ～……」
「二回目の欠伸だね～少し寝たら？」
「いや仕事中だし……」
「誰かきたら起こすからっ」
時雨に促されるままリョウは目を閉じる。
しかしリョウは眠ることが出来なかった。それは……

「顔が近いよ……時雨」
「えっ！？　あはははは……普通だよ」
やはり眠るのはよそう。そう思い顔を上げるとゴツンッと鈍い音がした。

「ッッッッ〜〜〜〜〜！！！！！」

「……」

時雨の頭がリョウの頭にぶつかったようだ。リョウはあまり痛くない顔をしているが時雨はデコを抑えて悶絶している。

「お久しぶり〜〜〜！　華瀬薫（はなせかおる）ただいま帰還ーーーって時雨ちゃん！？？」

薫は何事かと時雨に寄り添っていった。

リョウタの瞳は元に戻っていた。

一話……赤目の青年

終了

一章　赤目の少年（後書き）

どうでしょうか？

楽しんでいただけたら幸いです。

では次回作もお会いしましょう。

三カ月でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2950ba/

ＮＯＴ ＣＲＹ ＭＡＮ

2012年1月10日20時59分発行